

街は賑わっていた。先ほどから半被姿の大人や子供達をちらほらと見かけてはいたが、思った以上に派手な祭が、この駅周辺で催されているようだ。俺は車で彼女を連れて、家から離れた公園へ向かうところだった。

「ねえ。何祭？道、すごい規制されているけど」

隣で彼女が暢気そうに笑っている。

カー・ナビゲーションを見ながら走らせていると、通行止めに遭った。その場で仕方なく左折して、それまで来た道を戻り、流れに沿って出来るだけ進行方向に向かっていると、警備員が俺らの前に立ちはだかつて、俺は運転席の窓を開けた。

「すみませんね、いったんここで停車してお待ちいただけますかねえ」

「どのくらいですか？」

「ええ、すぐに呼びにきますんで」

何分待たされるのか検討もつかないで、俺と彼女はその場に閉じ込められてしまった。次第に太鼓の音が聞こえ始め、金物の高い音も混じっている。何かはこちらに近づいてきているようで、それは平然と現れた。巨大な山車だ。今やこの車道は車のためではなく、この山車のためにある。豪華な彫刻が施され、地名を表す筆文字の入った提灯や、幕で煌びやかに装飾されたその山車の周りを、引き回しの野郎が取り囲んでゆつくりと移動して行く。何やら三味線や笛の音も聞こえるから、山車の中にお囃子の女の子たちでも乗っているのだろうか。

「なかなか進めないわね。でもこんなお祭、滅多に見ないし、なんだかワクワク

クする」

相変わらず、彼女は苛立っていない。むしろこの状況を楽しんでくれている。それは幸いだが、俺の方が焦っていた。目的の公園の近くに見つけた穴場的な鰻屋を予約してあるからだ。交差点を挟み、斜め前の車道で止められていた車が案内されている。そろそろ俺らも動けるか。

「はいはい、ごめんなさいね、どうぞ進んでください」

警備員に促され、俺はサイドブレーキを解除した。半被姿の人々にじろじろと見られながらゆっくりと発進する。車に乗りながらこれほど注目されたことはない。こっちからすればあの山車が珍しいというのに、どうやら今は俺の方が珍しい存在になっているらしい。少し肩身の狭い気持ちで謎の申し訳なさを感じつつ、山車の後続車の後ろについた。ナビを確認すると目の前の信号を左折だが、山車もどうやら同じルートを行くみたいだ。このまま山車に付いて行っっては一利無し。隣で「お腹すいてきたー」とぼやき始めた彼女に俺は指令を出した。

「このナビを無視して、違うルートで行く。とにかく駅周辺はどの道も規制されているし、山車を避けて走りたい。いったんこの大通りに出れば脱出できるから、マップを見ながら隣でナビしてくれる？」

「オーケー」

彼女は出番が来たとばかりにノリノリで身体を起こした。彼女のナビはとて優秀で、俺も順調にそのナビに従った。最後、狭い道への左折を見過ごしてしまい行き過ぎたが、目の前の信号でまた規制が張られていて、俺は「ターンからの右折でなんとかやり過ぎし、そこから大通りへ抜けて、二人のコンビネーションで無事に祭の罨から脱出することができた。

「ナイスドライバー」

「ナイスナビゲーター」

「お腹すいた！」

「予約してある店、ギリギリ間に合う」

無事に鰻屋に着いた俺らは、勝利の祝杯をあげた。(彼女はビールを飲み、俺はノンアルコールで我慢)。鰻は皮がパリッと香ばしく炭火で焼き上げられていて、身は程よく柔らかい。薄めの甘ロダレとよく合って、「山車を出し抜いた褒美にしても贅沢だな」と俺が呟くとすかさず、「この鰻の肝のお吸い物の出汁もなかなかよ」と彼女は言っていて、俺はさらに満たされた心地になった。そしてしばらく鰻と穴子の違いについて語り合ってから、目的の公園に向かった。

「ありきたりな幸せね」

オレンジ色の炎が、うつむいた彼女の頬に揺れる。少し口角の上があった口元だけがはっきりと見える。耳の奥の方で鳴っている祭の残響以外、あたりはとても静かだ。ジーと草むらで少しだけ虫が鳴いている。無関係な祭の熱気から解放されて、ひとけのない真夏の夜の公園がやけに涼しく感じられる。

「夏がきて、正しく二人で線香花火なんかして。ゆうやくんとカップルみたいに過ごせていること」

「みたいになって、俺たちカップルだろ」

「そうだけど。なんか、ベタだなんて」

「恋人と線香花火をしていることが？」

「うん」

「いやだ？」

「ううん、幸せよ。なんか、その瞬間以上の幸せって、この先訪れるのかなって、よく思うの」

ハーレーダビッドソンのエンブレム・プレートが彫られたジッポライターで、彼女は新しい一本に火をつける。手慣れた手つきがなんとも奇妙だ。俺がアメリカ旅行をしたときに買ったこのジッポは、着火の際に絶妙な力加減と勢いが必要だから、華奢で大人しそうな「見た目」の女性が片手で難なく扱っている様は、何度見ても違和感がある。俺が煙草を吸うたびに、やらせて！と彼女はねだった。それで俺がホイールを回すコツを毎回教えてやったせいで、今やこの手つきだ。ギターでも、練習していれば弦を押さえる指の皮が次第に厚く硬くなって、指先に力を加えやすくなる。彼女はジッポ専用となった右手の親指を気に入っているらしい。それで普段からよく親指を眺めているから、気になるの？と聞けば、女がネイルアートを暇つぶしがてら弄り眺めるようなものよ、と彼女は答えた。

「そういえば、何人と付き合ったの？」

「どうして？今更な質問」

「あんまりそういうこと聞いたことなかったなって」

「まあ、ひとクラス分くらいかしら」

「え、三十人くらい？」

「まあ」

「まああって。え、じゃあ」

彼女は割って入るように「でも、」と顔を上げた。

「そんなに好きな人、いなかったわ」

「そんなに好きじゃない人と君は三十人も付き合ったの？」

「そ。だから三十人くらいと付き合ってみたのよ」

あっけらかんと笑う、そんな彼女の理論（理屈と言うべきか）に俺は妙に納得してしまった。

「こういう花火は、何回目？」

「あんまり覚えてないわ」

彼女はいっきに残りの線香花火に火を付け、「はい！」と嬉しそうに俺に手渡した。燃え上がり、弱まり、また激しく燃え上がって、俺は思わず手を放してしまった。

「あっつ。指、火傷したかも」

「大丈夫？そこに水道あるわよ」

「うん」

蛇口から勢い良くほとばしる水に指を突っ込んだ。ぬるい。後ろから、「ごめんね」と聞こえた。

「見て、こよりの先だけ、赤くジリジリしてる」

「一本ずつやった方がいいな」

「そうね」

「使い切ったし、帰ろうか」

「その前にコンビニ寄っていいかしら？アイス、食べたい」

踏みつぶして灰になった残骸を袋に入れ、俺と彼女は手を繋いでコンビニに向かった。袋を下げている指がジンジンと痛んだ。俺はアイスボックスを買って、熱を帯びたままの指を、彼女がアイスクリームを頬張る横でこっそりと冷やした。公園に戻って路肩に停めておいた車に乗り込むと、助手席のベルトを絞めながら彼女は言った。

「ちなみに、ゆうやくんは私にとっての一人目よ」

彼女は日頃から、意味深な、よくわからないことを言う。俺はいつも、その言葉の真意を追求できないし、追求しない。一言追求しだすと、切りがないからだ。

「ねえ。ナイトドライブしない？明日、日曜だし。どう？予定」

まるで、私は準備万端だけど、というふうには髪を耳にかけた。謎めきながらも自由奔放で無邪気な彼女が、なんだかんだ俺は好きなのだろう。真夜中の空にエンジン音が響く。

「問題ない」

「行き先は？」

「ひとまず、最寄りのインターチェンジ」

付き合ってもうすぐ一年が経つ。二人でテレビを見ているとき、音楽を聴いているとき、街を歩いているとき、海を眺めているとき、まるで遠い場所に置いてきた心の一部の、その追憶を辿るかのような彼女の瞳を見つける。その瞬間の彼女に、俺はずっと前から気付いていたはずだ。

「何考えているの？」

助手席の彼女が身を乗り出してきた。246号線、ちらちらと視界に映る厚木のネオンが眩しい。

「どこに連れていこうかなって」

「あら、楽しみ」

東名高速上りに入った。大型トラックに何台も追い越されながら、フロントガラスに浮かぶ月を追いかけて走る。窓を開けて外を眺める彼女の長い髪が、やわらかい夜風にさらさらと靡いている。良い香りがして、最近シャンプーを変えたと言っていたのをふと思いついた。その香りだろうか、それとも香水だろうか。彼女の部屋には香水らしきボトルがインテリアのように七種類以上並んでいて、普段どれを使っているのかも知らないし、どれが彼女自身で選んだものなのかもわからない。それに俺は、彼女のシャンプーと香水の香りの違いもよくわかっていない。

「真夜中の高速道路って結構暗いのね」

外に顔を向けたまま彼女がつぶやいた。

「もうちょっと行けば、高層ビルとか見えてきて綺麗だよ」

「ただ走っているだけでも気持ちいい」

彼女はまたしばらく黙って外を眺めている。もしも美化された過去があるとして、それ以上の今とこれからを築いていくことなどできるのだろうか。時が止まった事物に対し、過ぎ行く時間の中でいつでも壊れうる「今」はあまりに脆い。死んでしまった人には対抗できないように、俺は無力だ。生産性のない嫉妬心。ハイビームに切り替える。俺は彼女を愛する他にない。彼女が問いかけたことを問い返す。

「何考えているの？」

「ん。私たちどこに向かっているのかしらって」

「真夜中の東京タワー」

「見たことある？」

「ない」

「私、一回だけあるけれど、真っ暗だったよ」

「俺が聞いた話だと、基本的に24時にライトは消える。でも、タイミングが合えばタワーの一部分だけライトアップされるときがあるんだって。点検中とからしいけど」

「つまり運試し」

「ふっ。そうなるかな」

「私、海がいい。人がいない海辺って、夏だと珍しいでしょ。静かな、夏の夜の海」

「お台場に行く？ライトがついてたら東京タワーも寄って」

「ううん、横浜にしましょ」

時間は有り余っている。25時、車線変更。町田インターチェンジで降りて、16号線へ。何度となく二人で行った、横浜へ。

港に到着したとき観覧車は夜に溶け込んで、中央のデジタル時計は「1:43」を示していた。二人で並んでしばらく潮風を浴びた。ランニングのおじさんが



通りすがったくらいで、俺たちのようなアベックは一組も見当たらなかった。走ってきた車を降りてしまえば風もほとんど感じられず、静かに佇む真つ暗な海辺が真上の星たちを際立たせた。小さな点程のそれらは静止画の世界で異質な存在を放っていて、時の流れを唯一表しているもののように思えた。けれどもその瞬きが逆に永遠を感じさせるのは、気の遠くなる天体の歴史と、星々の儂さ故だろうか。俺たちは近くのホテルに泊まった。彼女のことを抱こうとしたけれど、その前に寝息をたてられてしまった。そういえば俺の隣で寝ているときが一番幸せだとか言ってたっけ。そんなことを思い出しながら髪を撫でる。これも、「ありきたりな幸せ」なのだろうか。彼女の古傷も、何もかも抱き締めて幸せにする、そんな自信と度量がほしい。俺らに明日の朝の約束などない。

いつの間にか眠ってしまったって、目が覚めると明け方 4 時を過ぎていた。腕の中には昨夜見た彼女の寝顔がある。俺は妙に気分が高揚した。自分でも笑ってしまうくらい単純だ。「起きて」と少し汗ばんだ彼女の頬をつついた。

「んー、何時・・・」

「四時過ぎだよ。おはよう」

「私、寝ちゃったの。ごめん。でもまだ四時・・・」

「出発するよ」

「え？」

「行きたいところがある」

「どこ？」

眠たそうに片目だけを半分開いている。

「人がいない、早朝の海」

彼女は一瞬考えて、

「もう。わかった。寝ちゃったお詫びね」

首都高速357号、寝ぼけ眼な君を乗せて、薄明るい青の湾岸線を走り抜ける。瞬かない星が、化学工場地帯に伸びる煙突群の中へ消えていく。やがて眠りから覚める世界は今日も規則正しく動き始める。ぐっとアクセルを踏み込んだ。昨夜の弱気と不安が吹き飛んでいく。

今という瞬間の、「ありきたりな幸せ」を聞かせ続けてくれ。君をまるごと連れて、この先、車線変更はなしだ。

「気分はどう？」

ひとりよがりな俺を、巨大ブリッジを吹き抜ける風が嘲笑する。

「ぼつちり目が覚めたわよ」

笑いながら、彼女はジッポーの親指を立てた。